

予防接種の学習会

～予防接種をした方がよいのか、しなくても大丈夫なのか？～

10月4日、鎌取コミュニティセンターにて、「予防接種の学習会」が開催されました。子どもが誕生してから、たくさんの予防接種があります。しかし、副作用の報告もあり、親として「摂取を受けるべきか、受けなくてもよいか」迷いがあります。「予防接種」は本当に必要なのか「副作用はどうなのか」「添加物は？」まずは、正しく理解をしようと、学習会が開催されました。講師は川本さんにご紹介いただいた新井秀雄先生です。

新井秀雄先生のプロフィール

1942年静岡県浜松市生まれ

北海道大学獣医学部獣医学科卒業、国立感染症研究所に就職。

主任研究官として細菌部で百日咳ワクチンの研究に従事。

1978年、米国立衛生研究所(NIH)へ2年間留学。

「百日咳菌の産生する赤血球凝集素と白血球増多およびヒスタミン増感因子」で獣医学博士取得。

その後、溶血連鎖球菌の研究に従事。2003年退官。

現在、市民団体のバイオハザード予防市民センター代表幹事。

著書に「科学者として」(幻冬社)他。



参加者は、大人41名、参加者の子ども33名(乳幼児)、計74名です。子どもの世話をしながら、新井先生の話聞く母の姿に、「子育て支援」の活動のあるべき姿を教えられたような気がします。



講演は、新井先生の

「専門家の言うことをうのみにしないで自分で考えてください。」

「私の言うことも本当かな？と思って聞いてください。」の言葉で始まりました。

【ワクチンを接種するべきか、しなくても大丈夫なのか】

副作用の危険を取るか

感染したら、きちんと対処するか

各自がよく考える

？現在、日本に存在しない病気のワクチンを何故、摂取するのか（ポリオ）

？流行していないのに、何故、接種するのか（日本脳炎・三種混合）

？効かないという説のあるインフルエンザワクチンを何故、接種するのか

* ワクチンを作る企業の利益のため

【結論】

- ・自然界の異物に触れることによって、身体が持っている**免疫力を強化**する。万が一、感染したときは、早期に対処する。
- ・最終的には各自で判断する。
- ・感染すると**致命的な病気は摂取**した方がよい。(狂犬病)
(狂犬病は日本にはない。感染地域に行く場合は、接種した方がよい)

新井先生への質問も途切れることなく、続けました。子どもを抱きかかえて質問する姿は、わが子を守りたい母親の強い意志を感じました。



～判断する材料～

【予防接種ができるまで】(例：ジフテリア)

- ① ジフテリア菌の毒素を集め、毒素がなくなるようにホルマリンで処理をする
- ② 実験動物のマウスで有効性の試験
- ③ 安全試験 (ウサギ・モルモットなどを使用)
 - ・ たくさん接種しても熱がでないか？
 - ・ 臓器への障害検査 (内臓を切り開いて調べる)

【感染力】

宿主 (人間) の体力によって違う

- 体力・抵抗力のある人 (大人)
- 体力・抵抗力のない人 (新生児・高齢者など)

* 感染しない予防 → 免疫力をつける

【免疫力とは】

病原体は人体にとって異物 (自分の身体とは違うもの)

人体は自分の身体は攻撃しないが、外から入ってくる異物に反応して攻撃する

この攻撃する力が免疫

免疫は、身体の中でありとあらゆる異物に対して活発に働く

* 自然感染が一番強い免疫力を作る。

例

新型インフルエンザに 60 歳以上の感染する確率が低かった

↓

自然に感染し、免疫力が強くなっている

一言

自分の身体を攻撃 = 免疫不全
自分の身体に対して攻撃する力は、小さい頃に消滅する

【ワクチン接種】

ワクチンは病原体と似たものを作って、それを身体に入れて免疫力を強くするという考え方
生ワクチン（生菌）＝生きた細菌やウィルスの毒性を弱めたものを接種する

感染した反応を起こさせる・自然界での発症を小さくする

ポリオ・BCG・麻しん・風しん混合ワクチン・水疱瘡・おたふくなど

不活化ワクチン(死菌)＝細菌やウィルスを殺し、対抗力を作るために必要な成分を抽出して作る
たくさんの抗原を入れないと効かない（複数回接種）

自然感染と比較すると大量の菌が必要

インフルエンザ、ジフテリア、百日せき、日本脳炎、三種・二種混合など

【ワクチンは必要か？】

- ・ 全てのワクチンは有害無益とは言っていない。
- ・ ワクチンが必要なものもある → 感染すると必ず死亡 — 狂犬病

狂犬病のウィルスは、日本にはないが海外にある。
狂犬病は、発症後の治療は難しい。
近年の発祥例：1970年ネパール、2006年フィリピンで狂犬病の犬にかまれ、
帰国後発症・死亡
渡航前に接種した方がよい。
また、黄熱病などは、接種しないと入国できない国もある。

【ワクチンの有効期間】

- ・ ワクチンによる免疫力は弱い（ワクチンで軽く免疫力をつけておくと自然界で感染するとさらに強くなるという考えもある）
 - ・ ワクチンの免疫はそれほど長くない（長くするためには安定剤が必要）
- * 自然界で感染すれば一生分の免疫力が付く

↑

これが問題

【子宮頸がんワクチン】

- ・ 感染しないようにするにはどうしたらよいか、性教育をきちんとした方がよい。
- ・ 接種することによる、性に関する問題の方が心配

子宮頸がんは、ヒトパピローマウイルスというイボをつくるウィルスの感染と喫煙やストレスによる二次刺激によるといわれている。異形成になるまで、数ヶ月から数年、異形成からがん細胞になるまで数ヶ月から数年。したがって、数ヶ月～1年ごとの検診をすることによって、がんの予防はできる。



最終的に各自で判断するといっても、判断材料が少なければ、親として、悩めます。また、ドクターに言われれば、もしかの時に診てもらうことを考えると、「接種しなければ」と思ってしまう。判断できる客観的な情報をきちんと伝えてほしいですね。
そして、流行時の予防や万が一感染したときには早期に対処すること、また、免疫力をつけることも大切ですね。